



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3684 号 2017.5.31 発行

居場所をつくろう 共生の現場から 第3部 障害者（上） 「地域と融合」

大阪日日新聞 2017年5月28日



温かな支えが突破

阿波座南公園の恒例イベント「グリーンフェスタ」で施設が出展したゲームコーナー。多くの来場者に好評だった（スマイル西ひかり提供）

「心配事を聞いてもらえる」「生活のリズムが保てる」「社会とのつながりができた」。

大阪市西区にある地域活動支援センター「スマイル西ひかり」（十河恵子施設長）の通所者が活動の手応えを語った。同施設は精神に障害がある人々の社会参加（復帰）などを支え続け、来年で開設20年の節目を迎える。地道な努力

と地元住民の理解によって、「内から外へ」「地域と融合」といった目標に大きく前進。施設名の通り「スマイル」（笑顔）に明るい「光」が差す中、通所者が地域の一員として充実した日々を送っている。

■地域に生きる□

同施設は、障害者に創作的活動や生産活動の機会を提供するほか、地域社会との交流促進を支援。現在は約20人が通所している。

施設長の十河さん（63）は長年勤めた医療業界を退職後、「生まれて初めてのボランティア」との志で福祉の世界に飛び込んだ。何も分からないところからの出発だったが、障害について真剣に学び、精神保健福祉士や社会福祉士、保育士といった資格を次々と取得。通所者を見守っている。

開設当初は施設内での活動が中心で、十河さんは「以前は地域の中でひっそりとしていた」と振り返る。「これでは地域で生きているとはいえない。何とかしなければ」と悩んでいたところ、地元の明治連合振興町会からの誘いという転機が訪れた。

■希望の泉□

明治会館と、会館が所在する阿波座南公園の清掃業務を、明治連合が2002年から同施設に委託し、現在に至っている。当時の明治連合会長だった袴俊介さん（故人）も障害について学び、住民に理解を求めて奔走。地域の温かな支えが突破口となった。

さらに大阪市が初の市民参加モデルとして同公園に設けたビオトープの造成作業に加わったこともまたとない好機に。住民や児童らと汗を流し、完成後の維持管理を任されていることも一同の大きな喜びだ。“地域の希望が湧く泉”とたたえられたビオトープは地域との融合に大きく寄与した。現在も後任の笹倉和忠会長ら住民、関係者の心強い支援を受け、汗を流す充実感をかみしめている。

■住みよいまち□

十河さんは「明治地域を通じて区全体の場にも出ていくことができた。西区地域福祉ア

クションプランにも大いに支えられている」と話す。施設が参加する行事の中には、西区や区社会福祉協議会（笹野井庸夫会長）主催のイベントも多く、区内の同様施設がネットワークを構築。異なる障害を相互に学び、理解する機会にもなっている。

笹野井会長（79）は「昔と比べて地域の応援など障害者に対して明るい社会になってきたのは明らか。西区でも一体感のある取り組みがなされていることを大変うれしく思う」と評価する。一方で、想定外の事態が発生する災害の対応や施設の整備といった課題も列挙。「われわれも情報発信などに尽力し、みんなが安心して暮らせるまちを目指したい」と期待を込めた。

障害者を取り巻く環境が大きく変動する中、地域社会での交流や住まいの現状、あくなき挑戦などを3回にわたり紹介する。

居場所をつくろう 共生の現場から 第3部 障害者（中） 「拠点から地域へ」

大阪日日新聞 2017年5月29日

スポーツ挑戦 身近に



自前の器具を付けてアーチェリーに取り組む田中さん＝大阪市東住吉区の長居障がい者スポーツセンター「ひろば」



で元気に体を動かす参加者ら＝大阪市住之江区の住吉



公園体育館

表に出て体を動かしたほうが絶対いい。初夏の足音が近づく平日の昼下がり、大阪市東住吉区にある長居障がい者スポーツセンターの屋外運動場で、右半身まひの田中一雄さん（67）がアーチェリーの弓を引いていた。右肩に巻いたベルト上の器具を使い、ほとんど力の入らない右手をフックに掛けた。ドン、50メートル先の的に命中。額にじんわり汗を浮かべながら、「なっ」。日に焼けた顔に白い歯が光った。

■ 1千万人突破

長居障がい者スポーツセンターは、1974年に開館した日本で初めての障害者のためのスポーツ施設。利用者は年々増加し、昨年9月には累計で1千万人を突破。大阪市此花区の舞洲（まいしま）と合わせた年間利用者は2015年に過去最多の64万8815人を記録した。

長居は昨年度プールの改修工事があり、年間利用者数が5年ぶりに減少に転じたが、センター内にある体育館は「毎月予約で満杯状態」（関係者）と依然活況を呈している。水泳やボッチャ、アーチェリーなど利用者が主体となった施設公認クラブの活動も盛んだ。

三上真二館長は「2020年の東京パラリンピック決定から障害者のスポーツがさまざまなメディアで取り上げられ、自分もやってみよう」と一歩踏み出す人が増えているようだ」

と分析。また利用者層の変化を「これまでの家族から、ヘルパーさんが連れてくることが増え、生活全般において障害者の選びやすい仕組みができているように感じる」と指摘する。

■自前の器具で

田中さんがアーチェリーと出会ったのは12年前。脳出血の後遺症で仕事を失った後、沈んでいた時期を乗り越え「何か始めよう」と長居を訪ねた。

当時はまだ右腕が上がり、口で引く「主流のスタイル」で練習していた。年々力が入らなくなり、昨年に自分用の器具を考案。アーチェリークラブの仲間の協力もあり、工夫しながら競技を続けている。

市内にある自宅から長居までは電車を乗り継ぎ「1時間以上」。右半身の「ぴりぴりとした痛み」は練習中も消えないが、「この施設のおかげで体を動かせる」と田中さん。この日は、30メートルから50メートルに距離を伸ばして2度目の挑戦で、「やるからには大きな大会に出たい」と力強い。

■それが“普通”

施設を管理、運営する大阪市障害者福祉・スポーツ協会は、障害者がより身近な場所でスポーツに親しめるよう各区の作業所や関連団体と連携しながら、区民センターや地域の体育館を会場にした「障がい者スポーツ・レクリエーションひろば」を展開中。

今年6月には各区のスポーツ推進委員を対象にした障害者スポーツ指導員の養成講習会を開く。ひろば活動を下支えするボランティアの地域サポーターらの拡大が狙いだ。

「障害のある人が普通に地域で過ごし、買い物し、スポーツする。それが普通という時代は確かに来つつあり、来てほしい」と願う三上館長。施設で芽吹いた共生の芽は地域へ、着実にその葉を広げている。

居場所をつくろう 共生の現場から 第3部 障害者（下） 「地域の中で」

大阪日日新聞 2017年5月30日



住居選択に幅を

「ロイヤルグレイブ平野」にはショートステイの部屋もある。ワンルームでユニットバス付き

大阪市は今年も市営福祉目的住宅の入居者を募集した（来月2日に公開抽選）。車いす常用者向けの設計で内装や整備を規定内で選択できる住宅もある。昨年の全体の倍率は2・7倍。市福祉局によると倍率は年々上がっているという。大阪府は公営住宅だけでなく、民間の賃貸住宅への入居を推進する体制整備を急いでいる。

■不動産+介護

地下鉄「平野駅」から徒歩10分程の7階建て「ロイヤルグレイブ平野」。一見一般的な賃貸マンションだが、障害者や高齢者専用とうたっている。オートロックの玄関からエレベーターで部屋に行くと、通常のキッチンやトイレ、風呂、そして24時間対応の緊急コールと可動式のベッドがある。

1994年に不動産事業で会社を興したクローバーホーム（天王寺区）の高山寛社長（55）は2009年に介護関連の免許を取得。10年に平野区と淀川区の管理物件を改装し、高齢者と障害者の専用マンションとして運営を始めた。

「体力勝負だが充実している」と笑顔を見せるのは、訪問介護員の政岡由純さん（61）。政岡さんが拠点にする「ロイヤル」6階の訪問介護の事務所にはヘルパーが24時間常駐し、入居者の朝晩の安否確認や緊急コールにも対応している。

■サービス連携

1階にはデイサービスもある。昨年は「地域共生型」のモデル事業として、高齢者、障害者、子ども向けの福祉サービスを一括して行い、入浴や機能訓練、レクリエーション、子ども食堂などを手掛ける。

入居する高齢者の多くはこのデイサービスも利用しながら、自分のペースで自由に暮らす。「医療介護が必要になるなど他の施設や病院に移る人もいるが、ここをついのすみかにする人も多い」（斉藤勝己施設長）。

しかし入居者のうち障害者は、このデイサービスを利用できない。「入居者以外の障害者ならいいという、よく分からない規制がある」と高山社長。「自立につながらない、というのが行政の言い分。他県では一定のルールのもとその規制が解除されている例もある。大阪でも早急な規制緩和を臨む」と語気を強める。

■誰でも入居

府と「Osakaあんしん住まい推進協議会」は障害者らの入居を拒まない賃貸住宅とその仲介を行う協力店、入居を支援する団体や相談窓口などの情報を発信。サイトでは民間賃貸住宅、住宅供給公社、UR都市機構の賃貸住宅の一元的な検索ができる。

今年3月には、「大阪あんぜん・あんしん賃貸住宅登録制度」を導入。07年から取り組む障害者らの民間賃貸住宅への円滑な入居をサポートする「大阪あんしん賃貸支援事業」の流れで、賃貸住宅経営者らに積極的な物件登録を要請している。

「賃貸住宅には誰でも入居できなければいけない、というのが基本だが、まだ拒否感があるオーナーさんもいる」と府住宅まちづくり部都市居住課の担当者。多くの選択肢の中から満足のいく住空間を整えるためにも、「すべての物件が登録されるようになれば」と願う。共生社会の、基本の一步である。

ミニクリップ

「Osakaあんしん住まい推進協議会」 不動産関係団体や民間賃貸住宅の賃貸人、UR都市機構や住宅供給公社など公的賃貸住宅事業者、大阪府、府内市町村などが正会員となり2015年3月に設立。住宅の確保に困難を感じている人らが安心して暮らせる環境づくりを図る。

知的障害者も自立生活を 東京で支援イベント

毎日新聞 2017年5月30日

2017年6月3日 (土)

■開場 17:45
■開始 18:00

会場：大阪府障害者生活センター 大会会場
大阪府東淀川区日守町1-1-1
1F特別研修室（1階）

■参加費500円

**知的障害者の自立生活
なぜ必要? どう実現する?**

話題提供①
NPO法人グッドライフの実践から
講師提供者：高木弘【スエナビコロシ】 さん

話題提供②
NPO法人はちくりうすの実践から
講師提供者：高木弘【スエナビコロシ】 さん

地域での実践事例を基に、知的障害者の自立生活は「なぜ必要か?」「どう実現するのか?」を話題提供者と参加者が一緒に考えていく相互学習イベントです

プログラム:
◎『知的障害者の自立生活に関する声明文』の紹介 スライドショー
◎話題提供① 実践事例あり NPO法人グッドライフの実践から
話題提供者：高木弘【スエナビコロシ】
「ひとり暮らし、介護者（ヘルパー）、支援者、介護コーディネーター、ケアマネ、子どもの障害当事者に出会う。その際、何を求めて自立障害者向けヘルパーとして働く。その際、「自立生活計画」の紹介と実践から、①「自立生活計画」の紹介と実践から、②「自立生活計画」の紹介と実践から、③「自立生活計画」の紹介と実践から、④「自立生活計画」の紹介と実践から、⑤「自立生活計画」の紹介と実践から、⑥「自立生活計画」の紹介と実践から、⑦「自立生活計画」の紹介と実践から、⑧「自立生活計画」の紹介と実践から、⑨「自立生活計画」の紹介と実践から、⑩「自立生活計画」の紹介と実践から、⑪「自立生活計画」の紹介と実践から、⑫「自立生活計画」の紹介と実践から、⑬「自立生活計画」の紹介と実践から、⑭「自立生活計画」の紹介と実践から、⑮「自立生活計画」の紹介と実践から、⑯「自立生活計画」の紹介と実践から、⑰「自立生活計画」の紹介と実践から、⑱「自立生活計画」の紹介と実践から、⑲「自立生活計画」の紹介と実践から、⑳「自立生活計画」の紹介と実践から、㉑「自立生活計画」の紹介と実践から、㉒「自立生活計画」の紹介と実践から、㉓「自立生活計画」の紹介と実践から、㉔「自立生活計画」の紹介と実践から、㉕「自立生活計画」の紹介と実践から、㉖「自立生活計画」の紹介と実践から、㉗「自立生活計画」の紹介と実践から、㉘「自立生活計画」の紹介と実践から、㉙「自立生活計画」の紹介と実践から、㉚「自立生活計画」の紹介と実践から、㉛「自立生活計画」の紹介と実践から、㉜「自立生活計画」の紹介と実践から、㉝「自立生活計画」の紹介と実践から、㉞「自立生活計画」の紹介と実践から、㉟「自立生活計画」の紹介と実践から、㊱「自立生活計画」の紹介と実践から、㊲「自立生活計画」の紹介と実践から、㊳「自立生活計画」の紹介と実践から、㊴「自立生活計画」の紹介と実践から、㊵「自立生活計画」の紹介と実践から、㊶「自立生活計画」の紹介と実践から、㊷「自立生活計画」の紹介と実践から、㊸「自立生活計画」の紹介と実践から、㊹「自立生活計画」の紹介と実践から、㊺「自立生活計画」の紹介と実践から、㊻「自立生活計画」の紹介と実践から、㊼「自立生活計画」の紹介と実践から、㊽「自立生活計画」の紹介と実践から、㊾「自立生活計画」の紹介と実践から、㊿「自立生活計画」の紹介と実践から、

◎話題提供② 実践事例あり NPO法人はちくりうすの実践から
話題提供者：高木弘【スエナビコロシ】 さん

◎グループワーク
声明文、話題提供者からの話題提供を基に、参加者で必ずグループワークを行います。感想、疑問、意見をグループ内でシェアして、意見共有をさせていただきます。
コーディネーター：高木弘【スエナビコロシ】
講師提供者：高木弘【スエナビコロシ】
コーディネーター：高木弘【スエナビコロシ】
講師提供者：高木弘【スエナビコロシ】

〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
TEL: 03-5561-1111 FAX: 03-5561-1112
E-MAIL: info@goodlife.or.jp
www.goodlife.or.jp

070(5572)7004
問い合わせ

「知的障害者の自立生活なぜ必要? どう実現する?」イベントチラシ=知的障害者自立生活声明文プロジェクト提供
知的障害者の1人暮らしなどについて考えるイベント「知的障害者の自立生活なぜ必要? どう実現する?」が6月3日

午後6時、東京都大田区の区消費者生活センターで開かれる。

国連障害者権利条約は、居住地や誰と生活するか、障害者が選択できる重要性をうたっている。しかし、国内では軽度の知的障害者なら1人暮らしをしている人はある程度いるが、重度の人たちは本人が望まなくても施設やグループホーム、家庭で生活していることがほとんど。

2014年から知的障害者も長時間の見守りができる重度訪問介護を利用できるようになったことから、制度上は自立生活がしやすくなった。しかし、知的障害者の支援者の間からも、1人暮らしへの不安や、サポートする人材の不足を懸念する声が出ている。その結果、自立への提案をしなかったり、できなかつたりするのが現状だという。

こうした支援者の自立生活への意識を変えてもらおうと、サービス事業者、当事者家族、研究者ら6人が知的障害者自立生活声明文Project（プロジェクト）を結成し、今年2月に「声明文」をインターネットで公開した。「知的障害のある人たちが公的介護を利用し、住み慣れた地域で自立した生活を継続していくための提案を、支援者がしていこう」と訴えている。

3日のイベントもプロジェクトが主催。NPO法人グッドライフの末永弘さん、NPO法人はちくりうすの桜原雅人さんが知的障害者が自立している実践例を紹介。参加者も交えたグループワークをする。プロジェクトのメンバーでNPO法人風雷社中理事長の中村和利さんは「1人暮らしのメリットはたくさんある。障害のある人も自立生活が最初の選択肢になるよう、一緒に考えてほしい」と話している。

参加費500円。定員100人。申し込み不要。問い合わせは中村さん070・5572・7004、メール jirituseimei@gmail.com。【上東麻子】

写真絵本で障害者の働く姿見て 津山の小山さん、4巻発刊 山陽新聞 2017年5月30日

働く障害者の姿を収めた写真絵本「障がい者の職場を見に行く」

全国の障害者の職場を訪ねて撮影取材を続ける小山さん

40年にわたり、障害者が働く全国の現場を撮り続けている日本写真家協会会員小山博孝さん（72）

＝津山市＝の写真絵本「障がい者の職場を見に行く」（童心社）が発刊された。親子で読めるよう、生き生きと仕事に取り組む障害者の写真に語り調の解説を付け、社会で活躍できる障害者が大勢いることを訴えている。

最近10年間に取材した約40人・組を4巻に分けて紹介した。1巻は保育士、ホームヘルパーといった「ひとのために働く」、2巻は「学校で働く」、3巻は神楽衣装製作や業務用マイク製造など「伝統や先端の世界で働く」がテーマ。被写体の障害者自身が語るように、小山さんが文章をつづっている。4巻は働く知的障害者3人の母親たちの手記で構成した。

岡山県内からも、聴覚障害を読唇術や筆談で補い、学生に情報処理を教える吉備国際大の男性講師や、倉敷市の製鉄関連事業所に所属し、パソコンを使った在宅勤務で設計図面を作製する進行性筋ジストロフィーの兄弟が登場する。

小山さんは大手出版社に勤務しながら、障害者就労の専門誌「働く広場」（独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構発行）のカメラマンとして活躍してきた。約30年前に出版社を退職後も、妻の郷里の津山市から取材に出掛けている。



障害者の職場が広がり、専門性やコミュニケーションの必要な仕事にも携わっているのに「難しい仕事はできないと決め付けている人が多い」という思いから、実際に働く姿を知ってもらおう写真絵本を企画した。

収録した取材対象のうち、特に小山さんの印象に残っているのは、福井県坂井市の中学校で給食を調理する知的障害者たち。一生懸命作った料理を配膳する彼らは「いらっしやいませ」ときちんとあいさつし、生徒も教員も全員あいさつを返すようになった。「障害者の働く姿が学校を変えた」と小山さんは言う。

今も年間50カ所前後の職場を取材している小山さんは「障害があっても、教えてもらえば仕事はできるしルールも守れる。企業や社会に支援が広がってほしい」と話す。

4巻とも縦30・3センチ、横21・6センチで40ページ。各2800円（税別）。

眞子さまへお祝い曲 読売新聞 2017年05月31日
床に置いたシンセサイザーのタッチ画面を押さえて音を出し、曲を作る井谷さん（倉吉市で）

◇「婚約」報道機に倉吉の男性作曲

脳性まひがあり、パソコンやシンセサイザーで演奏活動をしている井谷優太さん（32）（倉吉市）が、婚約される見通しとなった秋篠宮ご夫妻の長女眞子さま（25）を祝福する曲を作った。昨年10月、米子市で開かれた障害者のイベントで眞子さまと言葉を交わした時に感じた「優しい雰囲気」を音楽で表現したといい、「ぜひ、ご本人にも聴いていただければ」と願っている。（中田敦之）

眞子さまは昨年10月、「障がい者アートフェスタ2016」にご出席。出演者らとの交流会で、井谷さんに声をかけられた。井谷さんは「以前、作った曲を（動画投稿サイトの）ユーチューブで聴いてくださっていて、『すてきな、きれいな音楽ですね』と言ってもらった」と振り返る。

今月16日に婚約に関するニュースが流れた直後、「気さくで優しいお人柄をイメージした音楽でお祝いしたい」と思い立った。タイトルは「Shining Happy wind～眞子さまに捧ぐ、祝福の音～」（3分8秒）。ゆったりとしたテンポに、沖縄の音楽をほうふつとさせる独特の音階の旋律を乗せ、25日に完成させた。

井谷さんが音楽に興味を抱いたのは小学生の頃。生まれつき手足が不自由で車いすが欠かせないが、「家にいても友達と一緒に遊べるように」と父・憲人さん（58）が買ってくれたテレビゲームのBGMを聴くことにのめり込んだ。

「クラシック調やロック調など、たくさんの種類があって面白い」。高校卒業後には、パソコンの作曲ソフトを使って自らも電子音楽を作り始めた。

握った左手の拳を使い、パソコンのマウスや床に置いたシンセサイザーのタッチ画面、ボタンなどを器用に操作する。1日5時間も作業に没頭することもあるといい、和音やリズムの上に旋律を重ね、音の厚みを出す。

2013年、琴浦町出身の音楽プロデューサー・中原勇一さん（47）（東京都）と知り合い、音楽ユニット「DJ Yuta & Yuichi」を結成。15年には、NPO法人「日本バリアフリー協会」が主催する障害者の音楽コンテスト「第12回ゴールドコンサート」でグランプリを受賞した。これまでに約30曲を手がけ、県内外でイベント出演やライブ活動が続けている。

井谷さんは「音楽をやっていないなければ、こんなに外を出歩いたり、たくさんの人に出会えたりしていなかった。障害の有無に関係なく、みんなにチャンスがあるんだということを音楽を通じて伝え続けたい」と話している。

眞子さまへの祝福曲は、ユーチューブのページ (<https://youtu.be/eJdMT3-VLG0>)で公開



している。

生と向き合った画家を追う 大和で来月上映会

河北新報 2017年5月31日



展示中の石原さんの作品「日蝕（にっしょく）『お兄ちゃん怖い』『大丈夫だよ、僕が居るから』」

障害者の美術作品を常設展示する宮城県大和町の「にしびりかの美術館」は6月3日、東京都八王子市の精神科病院「平川病院」にある造形教室を追ったドキュメンタリー映画「破片のきらめき—心の杖（つえ）として鏡として」を再編集し、同作に登場する画家の故石原峯明さんに焦点を当てた特別編を上映する。

石原さんは1935年台湾生まれ。統合失調症により30代から入退院を繰り返した。97年以降、平川病院の造形教室で絵を描くことが生きる希望となり、2011年8月に75歳で亡くなるまで多くの作品を残した。映画は石原さんが絵を描き続ける姿に迫り、生きることの意味を問い掛ける。

「破片のきらめき」は、ドキュメンタリー映画「柳川掘割物語」（高畑勲監督、宮崎駿製作、1987年）で撮影を担当した高橋慎二氏の監督作品。

2008年、仏の第14回ヴズール国際アジア映画祭観客賞（ドキュメンタリー部門最優秀作品賞）を受賞した。今回上映する特別編は上映時間75分の同作をベースに95分に再編集した作品となる。

上映会は3日午後1時から。上映協力金1人1000円。定員30人。予約可。上映後、高橋監督と平川病院造形教室スタッフ宇野学さんの対談もある。同館は石原さんの作品約80点を展示する回顧展（入場無料）も7月17日まで開催中。連絡先は同館022（347）0028。

「充実残高」ある社会福祉法人7% WAMが福祉法改正で調査

福祉新聞 2017年05月30日 編集部

2017年の社会福祉法改正について社会福祉法人を対象に行った調査で、新たに定められた社会福祉充実残高が生じる見込みなのは1割以下であることが18日、福祉医療機構（WAM）の調査で明らかになった。

調査は17年4～5月、WAMが融資する9009法人を対象に実施（有効回答率41%）。法人の内訳は、高齢者福祉事業のみが34%、児童福祉事業のみが28%、障害者福祉事業のみが15%、複数事業が22%。サービス活動収益の規模は、1億～5億円未満が46%、5億～10億円が21%、10億～15億円が7%だった。

改正法では、法人の保有する財産から事業継続に必要な財産を控除して残った資金を「社会福祉充実残高」とし、「社会福祉充実計画」を策定した上で、計画的に再投資するよう定めている。

調査では、充実残額が「生じる」と回答した法人は7%だった。「生じない」71%、「試算していない」22%。充実残額の見込みは「1億～5億円」44%、「1000万円未満」15%、「1000万～5000万円未満」「5000万～1億円未満」14%の順だった。

充実残額が発生する法人のうち、充実計画を策定しているのは49%。投下先は社会福祉事業が95%、地域公益事業が3%、公益事業が1%と「社会福祉事業が第一優先の投下先であることを考えると妥当な結果」（WAM）となった。

社会福祉事業の中身についてみると、「既存施設の建て替え・増改築など」が52%、「新規事業開始」が26%、「職員処遇改善」が12%、「職員教育訓練」が5%だった。地域

公益事業の具体的な事業としては、生活困窮者レスキュー事業やこども食堂などが挙げられたという。



また、新定款に定める理事定数については「6人」が83%と最多。同様に評議員数には7人が66%を占めた。

調査結果についてWAMの担当者は「各法人が6月あたりに開く評議員会では、充実計画なども決めると思うので、参考にしてもらえれば」と話している。

豪、性犯罪者の出国禁止へ＝児童買春旅行を阻止 時事通信 2017年5月30日

【シドニー時事】オーストラリアのビショップ外相は30日、首都キャンベラで記者会見し、児童への性犯罪者が東南アジア諸国などへ「児童買春旅行」に出掛けるのを阻止するため法案を提出し、性犯罪者の出国を禁止すると表明した。世界初の試みという。

出国禁止の対象は、未成年者に対する性的虐待で有罪判決を受けて服役し、出所後も当局の監視下に置かれている性犯罪者。対象は2万人規模に上り、毎年約2500人のペースで増えている。

しかし、昨年には約800人の性犯罪者が海外へ渡航した。当局の承認を得ずに渡航するケースも多いことから、政府はより強力な予防措置が必要と判断した。

ビショップ外相は「小児性愛者から世界の子供を守るため、豪州は主導的役割を果たしたい」と強調。犯罪歴によっては性犯罪者のパスポートを取り上げると警告した。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行